

方言とコードスイッチング(1)

— 時間による推移を中心に —

多田 美有紀 (広島大学大学院)
犬飼 康弘 (広島大学大学院)
大 浜 るい子 (広島大学)

0. はじめに

かつて、方言と標準語が異なる2つの言語にたとえられえた時代には、方言話者と標準語話者を区別することが可能であった。しかし、誰もがどちらも自由に操れるようになったと言われる現在、この2つの言語は地域的社会的な変異というよりは、フォーマルな場面とインフォーマルな場面で使い分けられるスタイルの違いになっている。特に若い人たちの間では、標準語を用いれば十分に丁寧に話していると考えている人もあり(真田・勝村 1991)、標準語はフォーマルな文体というだけではなく、敬語と同列に考えている人さえいるようである。この様な状況では、方言と標準語の使い分けという問題は、これまでもまして、話し手や場面に固定したものという捉え方では不十分であろう。というのも、これまでの研究で、方言と標準語の使い分けを規定する要因として(1)のようなものがあげられているが、いずれも調査時の設定では「目上対目下」「公的場面对私的場面」のように固定されているものが多いからである。

- (1) 相手との関係(上下・親疎・性別・心理的距離)
話題(個人的なもの・一般的なもの)
話し手の属性(年代・性別・学歴)
場面(公的・私的)など

われわれがここで採った方法は、同一人物間の談話を一定期間連続して観察するというものである。これまでの考え方から言えば、この様な状況では使用されるコードは一定になるはずである。しかし、はたしてそうだろうか。場面や対話者間の関係が変わらなくても、ときどきの話題や刻々に作り出される対話相手との心理的な距離などにより、変化しうる、ある意味ではストラテジックな側面からの考察が必要なのではないかというのが、我々の認識である。

一方、日本語教育では、標準語以外に方言を教えるという動きがある。ニーズもあるようである。教室で学ぶ日本語が生活の中で耳にする日本語とは

違うからであるが、限られた授業時間内でどのような方言指導をするのがいいのだろう。以下の観察と分析は、この問題に対してもある方向性を示唆できるはずである。

1. 標準語と方言の使い分け(調査1)

1-1 資料の概要

ここで取りあげる資料は、2人の大学生¹⁾による計4時間27分分の談話である。2人の学生は広島以外に外住歴のない広島方言母語話者である。2人には約6週間にわたって、週一回約1時間、予め決めておいたテーマに関して自由に話をしてもらい、その談話風景をビデオに撮影した。談話自体は、自発的なものではない上に、承諾していたとは言え、ビデオに撮影されながらのものであったことを考えると、決して厳密な意味での自然談話ではない。しかし、ビデオ撮影者(=筆者らのうちの1人)がいずれの学生ともよく知った仲で、テーマも差し障りのないものが選ばれたので、談話進行がそのために大きな影響を受けたとは考えにくい。ただ、考察に際してはそのことを常に考慮したつもりである。2人の広島方言話者は初回時には初対面であり、又それ以降も定められた談話収録時以外に互いに会うことはなかった。その意味で、この資料は新たに人間関係が生まれ、それが続いていく過程の中で、言葉がいかに変化していくかを見ることのできる格好の材料である。今回の分析は、非言語行動、及びアクセント、イントネーションを扱わなかったので、ビデオそのものではなくそれを文字に起こしたものを資料としている。資料の概要は以下のとおりである。

①談話参加者

- S : 広島方言話者, 学生, 外住歴なし, 男, 25才
K : 広島方言話者, 学生, 外住歴なし, 女, 23才

②談話採録場所

東広島市にある公園にて、野外収録

③談話採録日と話題と談話時間

談話採録日	話 題	談話時間
1995. 5. 29	自己紹介	26分
1995. 6. 5	休日の過ごし方	47分
1995. 6. 12	自分の専攻	47分
1995. 6. 26	夏休みの思い出	77分
1995. 7. 3	就職	34分
1995. 7. 10	自分の好みのタイプ	36分

1-2 作業手順と広島方言の認定について

この談話の場面設定は、対話者間の関係も含めて、次の点でユニークである。すなわち、これまでの研究で明らかになっている方言と標準語の使い分けを規定する要因(1)参照)の多くが、ここでは一定であるという点である。そのため、談話日ごとに標準語と方言の使い分けが異なった場合、それが一定でない「親疎」と「心理的距離」によるものであると解釈することができるのではないと思われる。さらに好都合なことには、この二つの要素が変化するのは、時間に沿って一方向に限られているという点である。争いなど特別なことが起こらない限り、通常は疎から親へ、距離は大から小へ変化するものだから、言語使用における変化との比較が容易であると言える。

実際の作業は、4時間27分分の文字化された資料(A4で約150ページ分)の中の広島方言を数え上げるというものである。

広島方言は、町(1994)、神部(1983)に従えば、備中西辺を一応の境界として安芸方言と備後方言に分かれているが、本研究で言う広島方言とは、図1の西部で使われている安芸方言をさしている。

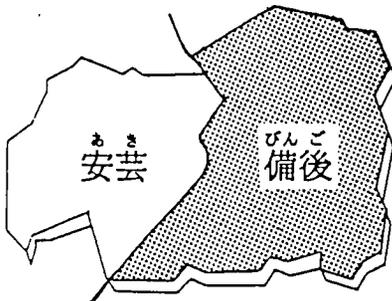


図1 広島の方言の分布

広島方言と認定した語は巻末に示したとおりである(資料1参照)。認定は基本的には町(1994)に従ったが、さらに広島在住1年以内の他府県出身者に、その確認のための調査を行い、つけ加えたものがある。だから、いわゆる純粋な広島方言の他に、広島方言で

はないが広島方言だと意識されている語というのが含まれている。そしてそれらを特に区別することはしなかった。方言と標準語の使い分けという行為の背景には、言語学上の分類よりも、個人的な判断や意識の方が重要であろうと思われたからである。

ところで、実際の作業にはいる前に、我々は図2のような結果になるのではないかと考えていた。すなわち、方言使用はゼロから始まり、時間の経過に比例して増加する、但し、談話日が変わるなど時間経過が中断されると、そこで一旦使用が減少するだろうというものであった。ゼロから始めると考えたのは、一般に初対面では方言は使用されないとと言われてきたからであり、不連続時点で一旦使用頻度が下がるだろうと考えたのは、長い別離の時間が対話者間に再び心理的距離を作るだろうと考えたからである。

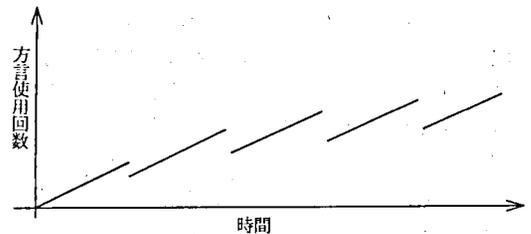


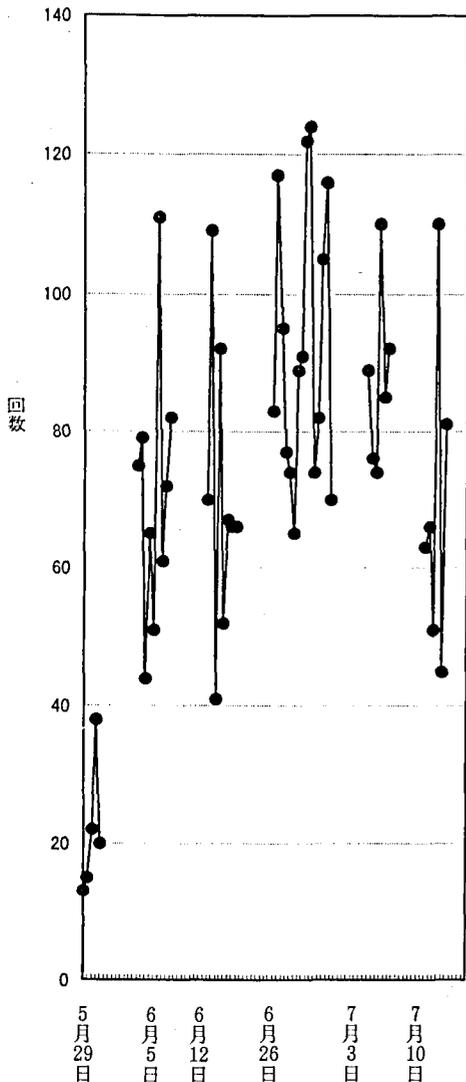
図2 方言総数の時間による推移の仮説

1-3 結果と考察

1-3-1 時間軸から見た方言使用の実態

グラフ1に示すのは、資料から明らかになった談話日別の方言使用量の推移である。1ドットは談話開始より5分きざみで数え上げた方言量を示している。

グラフから次のことが明らかになる。まず、第1回目と2回目以降で方言の出現頻度に大きな違いがあることである。第1回目は初対面である。既に顔見知りになっている2回目以降とは明らかにスタイルが違っていると云っていい。初めて会ったときには互いに遠慮もあり、どちらかといえばフォーマルなスタイルが選ばれ、顔見知りになってからは親しい間柄で用いられるカジュアルなスタイルが用いられたことは、親疎によって方言と標準語が使い分けられるという、これまでに言われてきたことを裏付けている。ただ、初対面で方言が全く用いられないというわけではないことにも注意しなければならない。「使い分け」と言っても、方言か標準語かという二者択一ではなく、談話内での両者の割合が異なるだけなのである。とは言え、2回目以降は、どんなに出現頻度が少ない時でも1回目の最高値より下がることはなく、1回目と2回目以降に



談話日

グラフ1 方言総数の時間による推移

は決定的な違いがあるということは強調したい。

次に、2回目以降についてであるが、回を重ねるごとに対話者間に親しさが増したであろうことと対応するように、方言の出現頻度がわずかながら高くなる傾向にあることである。ただ、観察が6週間で終わったために、この差が有意なものかどうかの判断は難しい。すなわち、これは、観察期間を長くすれば、それに応じて方言使用もさらにわずかながら増えていくということの兆候なのか、それとも観察期間を長くしてもほぼこのあたりに落ちつくと言わなければならない程度の差なのか、この調査だけでは断言できない。しかし、

筆者達は前者の可能性を取りたいと考えている。というのもひとつには、3回目(6月12日)と4回目(6月26日)の所で出現頻度の最下点に大きな違いがあり、もうひとつには、出現頻度の最上点と最下点の間の幅が徐々に小さくなっているからである²⁾。これらから、2回目以降をひとまとめにしてしまうよりは、回を重ねていくにつれて変化すると考える方が妥当ではないかと判断した。頻度数の振幅が小さくなるというのは、方言の使用頻度が安定しているということである。2回目以降は様に「顔見知り」であるとは言え、対話者の心理的距離がつかめない状態から、時間の経過と共に徐々に距離が決まってくる様子がこの幅の変化に写し出されていると言えないだろうか。振幅の大小は、フォーマルスタイルにするかカジュアルスタイルにするかの迷い、心理的距離が決定するまでの揺れと解釈できるのではないだろうか。

このように考えると、談話日ごとにマクロに見れば、知り合ってから経過時間に比例して方言使用は増加するが、一回の談話内でミクロに見れば、方言出現頻度は経過時間と相関しないということになる。この点は、我々の最初の予想に反していた。

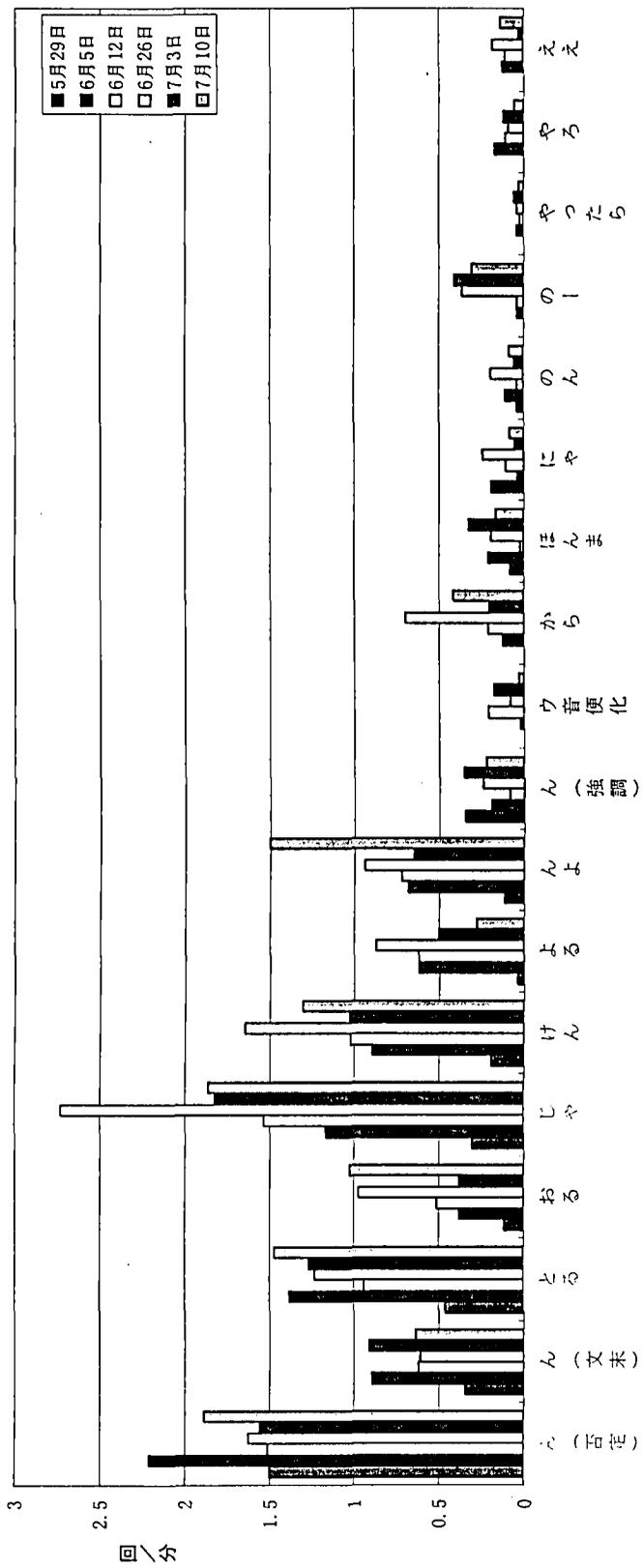
これらをまとめると以下のようなになる。

- (1) 初対面の相手と顔見知りの相手では標準語と方言の使い分けがなされる。
- (2) 顔見知りになった後も、顔を合わせる回数が増えると方言使用が増加する。
- (3) 一談話内では方言使用にむらがある。
- (4) 顔を合わせる回数が増えると方言使用のむらは小さくなり、使用頻度が安定していく。
- (5) 方言使用頻度の安定は、対話相手との関係が安定していくのと同連があるのだろうと予測される。

1-3-2 語彙別に見た使用の推移

1-3-1では、方言使用は量に関しても使用の安定度に関しても、時間の経過に比例して増加していくことを見てきたが、次に表現形式間に使用の偏りがあるかどうかを見ていこう。

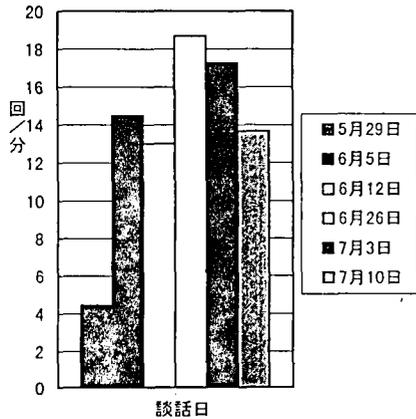
52種類の表現形式を広島方言と認定して作業をしたのであるが、使用頻度に関して表現間には大きな偏りが見られた。グラフ2は上位18位までの表現に関して、その出現数を時間当たりの数にして談話日別に集計したものである。19位以下の方言についてはグラフ化できるだけの頻度に達せず、「はた(=他人)」「ようけ(=たくさん)」などのように1回だけというものもあった。これを見ると、上位に位置する方言はもっぱら助詞、助動詞などに偏っているこ



方言の種類

グラフ2 方言の種類と時間による推移

とが分かる。すなわち、方言使用と言っても、名詞、形容詞、動詞などある意味では情報内容を構成するものではなく、文末などに現れるものが多いということである。教育現場において、方言を教えるという場合にどの様な方言から教えていけばいいかということに対して一つの回答を提示していると言えよう。ところでグラフ2の使用推移を方言ごとによく見ると、必ずしもすべての表現の使用傾向が似ているわけではないことに気がつく。方言の全体的な使用傾向は、1-3-1で見たように、初回と2回目で見ると大きな差があり、2回目以降は徐々に増加するというものであった(グラフ3参照)。



グラフ3 談話日別方言総数

「じゃ」「けん」のように、この全体的な傾向に非常に近い増え方をする表現もあるが、他方で初回から頻繁に使用され、必ずしも時間経過と共に増えるとは言えない表現もある。否定の「ん」や強調の「ん」がそれである。これは、いったい何を意味しているのだろうか。全体的な傾向と平行している表現では、初対面と顔見知りで、あるいは対話者間の心理的距離の違いで、使い分けがなされていると見るのが自然であろう。では、後者の、言ってみれば常に一定の頻度で出てくる表現というのは、このような場面要素に影響を受けないものなのだろうか。とすれば、同じ方言と言っても、話し手達にとって方言という意識のある語とない語があると云わねばならない。方言らしさにランクの別があるというのだろうか。

そこでわれわれは次のような仮説をたて、調査2を実施した。

仮説1：方言には、方言だと意識される程度が高い語と低い語がある。

仮説2：方言だと意識される程度が低い語は初回から多く出てくるが、反対に意識される程度が高い語は、なかなか出にくい。

2. 方言使用の出現傾向と方言意識の関係(調査2)

2-1 調査の方法

上記の仮説を検証するために、今回出現頻度が際だって多かった上位8つの方言を取り上げ、それらが広島方言であるかどうかについて質問紙調査を行った。被調査者は広島在住の学生(調査1と同年代)36名とした。

質問紙には、調査1で得られた談話資料の中から「ん(否定)、ん(文末)、とる、おる、じゃ、けん、よる、んよ」を含む談話を無作為に抽出したものを載せ、被調査者にはその談話内で広島方言と思われるものに線を引いてもらった³⁾。それぞれの方言は全談話中に3つずつ入れられており、3つすべてに下線が引かれているものには3点、以下2点、1点、0点として得点化した。得られた資料は、上記の方言8種類について一要因計画の分散分析を行うことにした。

2-2 結果と考察

調査結果の単純集計を表1に示す。

一要因の分散分析をしたところ、方言間には5パーセント水準で有意な差があることが分かった。又、分散分析の下位検定(ライアン法による)の結果、次の方言間に有意な差があることが分かった(いずれの場合も $p < .05$)。

- (2) 「じゃ」と「おる、ん(文末)、ん(否定)」
- 「けん」と「ん(文末)、ん(否定)」
- 「よる」と「ん(否定)」
- 「とる」と「ん(否定)」

表1 各方言の得点

方言の種類	じゃ	けん	よる	とる	んよ	おる	ん(文末)	ん(否定)
平均値	2.667	2.556	2.472	2.250	2.056	2.028	1.917	1.472
標準偏差	0.624	0.598	0.833	1.090	1.026	1.280	1.277	1.118

表2 広島方言度と出現傾向

方言の種類	じゃ	けん	よる	とる	んよ	おる	ん(文末)	ん(否定)
広島方言度	++	++	++	+	±	±	±	-
出現傾向	↗	↗	↗	→	→	↗	→	→

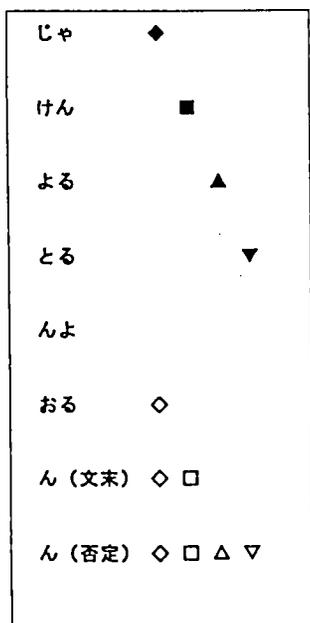


図3 方言意識調査下位検定結果

図3の黒く塗りつぶしたそれぞれの記号は、白抜きと同じかたちの記号に対して有意に差があることを示している。

(2)に示した組み合わせ以外の方言には、有意な差を見つけないことができなかった。したがって、少なくとも「じゃ」や「けん」が方言だと意識される程度が比較的高く、「ん(否定)」はその程度が低い。そして、それら以外はその中間に位置するのではないかと推測できるのではないだろうか。ここで再度、単純集計(表1)に戻って、各方言の平均値を見ると、「じゃ、けん、よる」「とる」「んよ、おる、ん(文末)」「ん(否定)」の間に段階的な差のあることが見て取れる。今、仮にこれらをそれぞれ++、+、+-、-、と記号をつけて区別した。それをグラフ2の方言出現傾向と対照すると、両者の間にある程度の対応が見られる。表2の↗は時間の経過と共に段階的に増加する方言を表し、→は初回から常に一定の割合で出現する方言を示している。特に++の方言や-の方言ではその対応は顕著である。

3. まとめ

本稿では、初対面から定期的に出て話してもらった談話資料を、時間に沿った方言使用の推移ということに焦点を当てて分析を行った。結果として次のことが明らかになった。

初対面時と既に顔見知り後では標準語と方言の使い分けが行われる。顔見知りになった後も、顔を合わせる回数が増えると言語使用が増加する傾向にある。そして、その増え方は決して単純に増加するというのではなく、互いの中で許される心理的距離を測っているかのように、使用の頻度が大きく揺れる。しかし、やがて、談話回数が増えるにつれ、その振幅も小さくなり、互いの関係にふさわしい方言使用量が決まっていくようである。

ところで、方言には方言であると意識される程度が高いものと、その程度が低いものがあり、上述のことが言えるのは前者に属する方言である。後者に属する方言は初対面であろうか顔見知りであろうか、常に一定の割合で出てくるようである。

個々の語の「方言だと意識される程度」については、改めて調査しなければならないが、ここで取りあげた8つの語に限定すれば、広島のみで用いられるいわゆる「広島方言」に方言意識が高く、広島を含むさらに広範囲で用いられる「西日本共通語」と呼ばれるものに方言意識が低かった。又、方言意識の低い語は高い語に比べて、その判断において被調査者間にばらつきがあった。すなわち、いわゆる方言らしい方言は誰もが方言であることを意識しており、それ故に相手次第で使用を控える語であるが、一方、方言だと意識されにくい語は、人によってその判断が異なるうに、意識していない分だけコントロールしにくく、使用頻度も高くなる、ということである。また、方言意識の程度も、高いか低いかという性質のものではなく、段階的なものであろうと思われる。

4. おわりに -教材化に向けて-

日本語学習者が各地で増加し、多様化する中で、彼らの要求も様々な変化してきている。特に、地方で日本語を学習している学習者の場合、教室で学習する日本語と実際耳にする方言を含めた日本語との隔たりが大きく、実生活で役に立つ日本語を求める声が高い。

しかしながら、従来の日本語教科書では標準語のみを扱っていることが多く、方言教育については必要性が言われながらも、あまり進んでいないというのが現状である。確かに方言は限られた地域でしか使われないため、日本語教育用教材として取りあげにくい面があることは否めない。また、たとえ地域を限ったとしても、方言自体が広範囲である。限られた授業時間を考えれば、教えるべきものを選択しなければならないだろう。

ここで示したわれわれの研究は、1組の男女の会話を6週間に限り観察、分析したものに過ぎないから、ここで明らかになったことをただちに一般化することは決してできないし、その意味では今後、検証されなければならないものではあるが、少なくとも教材化に向けてどのような予備調査をすればよいか、その方向性は示すことができたと思う。

われわれの例では、初対面の2人であっても、2度目に会ったときには既に方言使用が飛躍的に増大していた。学生同士という特殊な関係が影響していると思われるが、教室で習う日本語(=標準語)だけを耳にする期間は意外に短いかもしれない。又、2回目以降、2人のあいだの心理的距離を測りながら方言使用が大きく揺れることを見たが、これは逆に言えば、方言使用においては、心理的距離を常に考慮しなければ、かえって失敗する危険性もあることを示唆している。方言学習の必要性は主として学習者達から出てきたものだが、方言を教えることは、あるいはわれわれ日本人教師が考えている以上に、人間関係保持に影響を与えるものなのかもしれない。だから教材化に向けて、その提出順序や使用場面については十分な注意が必要だろう。

とりわけ今回の調査から言えることは、方言意識に程度の差があること、そしてそのうちの低いものは初回から多く用いられ、心理的距離を誤る危険性の少ない語であるらしいこと、それ故学習者には失敗が少なく、使いやすい語であるということである。また、初対面時から多く使われる語であるということは、耳にする機会も多いということであり、日常的に役立つものだと考えられる。また、意識程度の低い語はいわば、より広範囲に用いられる「地域共通語」である可能性が高いので、従来の方言教育においては個々の地域性が求められ教材化が困難であったが、より広範囲な地域共通語から学習するのであれば、その問題点も解消されるだろう。すなわち地方地方の方言よりも、もう少し広い地域で共通に用いられる「地域共通語」こそが必要であるということになる⁴⁾。そうなれば今度は、教材化を前提にした地域共通語に関する調査・研究が不可欠になるだろう。

注

- 1) 談話場面にはこの2人以外に、M(非広島方言話者、初対面時には広島在住約1カ月、学生、女、23才、Kと友人)がいた。被調査者に広島方言話者でない者を含めたのは、非方言話者に対してどのようなコードスイッチングが行われるかを観察するためであるが、それについては今後の課題である。今回の方言量調査ではMの発話分は取りあげなかった。Mの発話量はS、Kに比して著しく少ないため、そのことによって結果に影響が出たとは考えにくい。
- 2) 談話最終日(7月10日)は例外。「好きなタイプ」という話題のせいかと思われるが、話題と方言使用の関係については今後の課題である。
- 3) 資料2参照
- 4) 方言学習は「方言だと意識される程度の低い語」から始めるのがよいと思われるが、それが学習者にとって本当に理解の難しい語なのかどうかは別に調査する必要があるだろう(縫部義憲氏からの指摘)。

付記：この研究は、平成8年度文部省科学研究基盤研究(B2)「地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究」(研究代表者：今田滋子、課題番号08458056)の助成を受けて行われた。又、統計に関しては松見法男氏のご教示を受けた。ここに記して感謝したい。

参考文献

- NHK ことば調査グループ(1980)『日本人と話しことば』日本放送出版協会
- 大石初太郎(1971)『話ことば論』秀英出版
- 尾崎喜光(1991)「言語生活の中の方言」徳川宗賢／真田信二編『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.30-48
- 小野米一(1986)「相手による言葉の使い分け—北海道の集団入植地での調査から—」馬瀬良雄編『論集日本語研究10 方言』有精堂 pp.151-160
- 加藤正信(1983)「方言コンプレックスの現状」『言語生活』377 pp.28-34
- 神部宏泰(1983)「34 広島方言」平山輝男編『全国方言辞典1 県別方言の特色』角川書店 pp.216-221
- 国立国語研究所(1981)『国立国語研究所報告70-1 大都市の言語生活 分析編』三省堂
- 国立国語研究所(1990)『国立国語研究所報告102 場

而と場面意識』三省堂

真田信二・勝村聡子(1991)「方言と標準語の使い分け」『言語』vol.20 No. 8 pp.48-52

陣内正敬(1988)「言語の変種とスピーチスタイル」『日本語学』Vol. 7 No. 3 pp.77-88

町博光 他(1994)「第10課」縫部義憲監修『もみじII』広島県 pp.97-107

御園生保子(1983)「方言と標準語の場面による切りかえ」『言語生活』377 pp.36-49

吉沢典男(1976)「日本語の方言」金田一春彦編『日本語講座第一巻 日本語の姿』大修館書店 pp199-226

資料1

今回広島方言と認定した語一覧

(=の後は標準語の表現)但し、広島方言の他に、広島方言と意識されている語を含む。

あがりぎわ (=あがり口)

今頃 (=最近)

ウ音便化 (例:言うて=言って)

ええ (=いい)

おおごと (=大変なこと)

おる (=いる)

かいね (例:おったかいね=いたかしらね)

から (例:言うてからね=言ったのよね)

きちゃんない (=きたない)

けー/けん (例:白いけー=白いから)

げ (例:うれしげに=うれしそうに)

形容動詞の終止形接続 (例:きれいなけー)

こりゃ (=これは)

こやって (=こうして)

じゃ (例:夏じゃった=夏だった)

助詞の省略 (例:行く言うて=行くと言って)

すまー (=するまい)

接続助詞の省略 (例:できんようなる=できないようになる)

「せ」と「し」の交替 (例:乗して=乗せて)

そんだけ (=それだけ)

たいぎい (=めんどうくさい)

ちゃり (=もみあげ)

ちゃれ (例:見ちゃれ=見てやれ)

ちよっちゃった (例:しちよっちゃった=しておられた)

長音化 (例:赤ーなる=赤くなる)

ちよる (例:しちよる=している)

て (例:やるじゃろうて=するだろうよ)

で (例:学校行くで=学校へ行くので)

でから (例:停電でから=停電なので)

とく (例:考えとく=考えておく)

とる (例:思うとる=思っている)

にゃ (例:せにゃいけん=しないといけな)

のう (例:惜けないのう=惜けないなあ)

のん (例:描かんのんよ=描かないのよ)

はあ (文頭に用いる間投詞)

はた (=他人)

ほいで/ほんで (=それで)

ほう (例:ほうよね=そうよね)

ほんま (=本当)

やー (例:言やーええ=言えばいい)

やおい (=やわらかい/やさしい)

やったら (例:広島やったら=広島だったら)

やろ (例:土曜やろ=土曜でしょ)

拗音化 (例:おおきゅうない=大きくない)

ようけ (=たくさん)

よる (例:泳ぎよる=泳いでいる)

りゃーせん (例:やりゃーせん=したりしない)

わい (例:遊ぶわいね=遊ぶよね)

ん (強調)(例:おってんない=いらっしやらない)
(おってないの強調)

ん (否定)(例:帰れん=帰れない)

ん (文末)(例:そんなんきまっとるん?=そんなの決まっているの?)

んよ (行くんよ=行くのよ)

(50音順)

資料2

調査2の質問紙(抜粋)

あなたが広島方言だと思うものに下線を引いて下さい。方言が複数入っている場合も、一つも入っていない場合もあります。アクセントにより異なる場合は、文字面で判断して下さい。

例 A:びっくりした。誰かと思うたわ。

B:ごめん。おどかずつもりは・・・

A:ちょっとはあったんちゃうか?

1 A:悲しいときに悲しい曲聴く人っておる?

B:私がそうよ。

A:あ、そうなんだ。理解できんなー。

2 A:Bちゃん、何か習い事しよった?

B:うん、ピアノ習っとったよ。

A:いいなー。

- 3 A:名古屋弁ってどんなん?「みゃー」とか?
B:そんな言葉, あんまり使わんよ。
A:そうか。名古屋の人ってみんな「みゃーみゃー」言うんか思うた。
- 4 A:広島市内に住んどる人からいつも「呉弁」とかって言われる。
B:へー。でも広島弁ってよく分からん。
A:深く考えるけーよ。直感で考えれば分かるって。